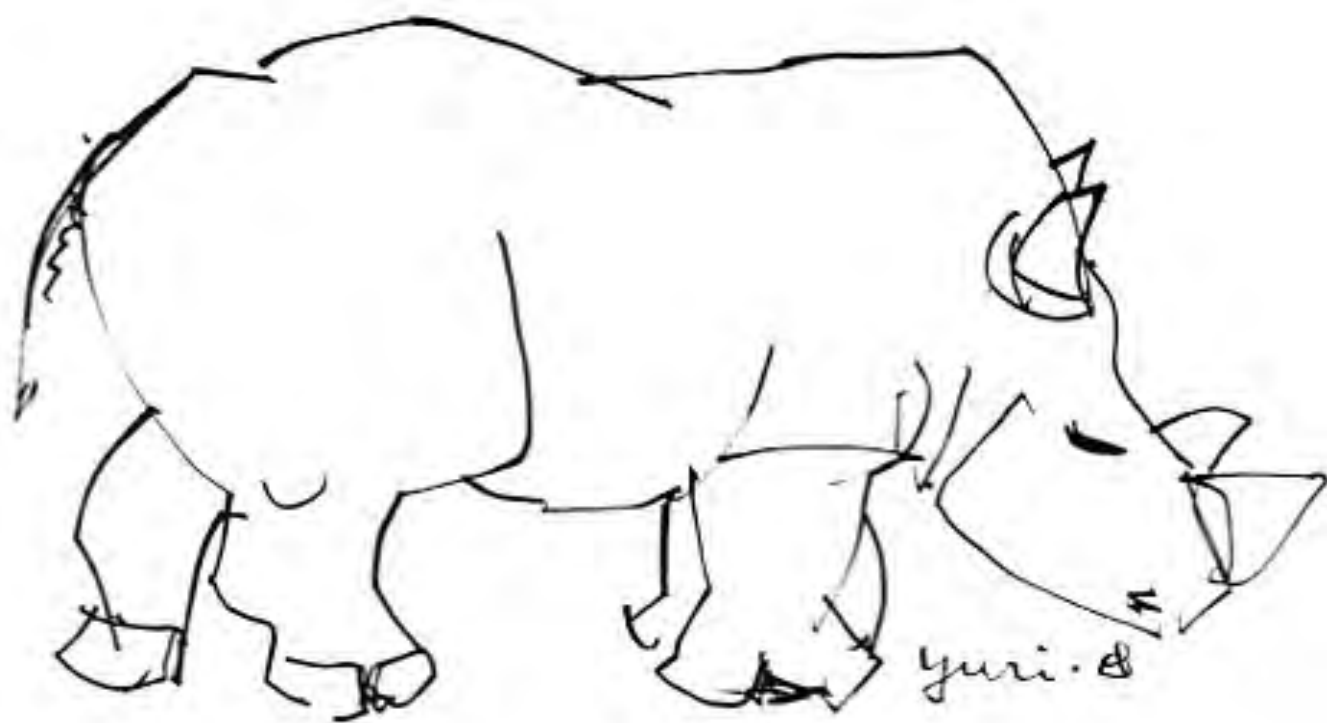


かたね

ふ



黒羽集

(二十一三)

佐藤喜仙

朝顔のなべて濃紺好かれけり

稲刈つて鳥海山の威容かな

デントコーンサイロに吹き詰む秋日和

何やかと梅雨のひと日のすぎゆけり

蝉時雨あびて散歩を引き返す



電柱に蝉のこゑする真昼かな

みんなの声高々と七月尽

過疎の村タイの嫁きて八月大名

岸壁の鯨釣ひがなあわただし

雷激し降雨は花に水やるほど

心の何か色なき風が運びさる

寝ころべばさらはれさうな星月夜

かさね集

白選句集



「葛咲く」

松本周二

蓬かなる子らの喧噪秋桜

廃屋の庭を覆ひて葛咲けり

葛の葉のひらひら車通るたび

穴の中飛び出しさうな蓮の実

秋澄むや十二神将の立ち姿

病室の窓よぎる飛機秋夕焼

「スカイツリー」

古川千鶴

浜離宮三百年の松手入

秋晴れや仰ぎて潜る雷門

水門の岩のかき殻葉月潮

秋暑しスカイツリーは雲に触れ

秋日差し踏み潮入の池めぐる

銀泥の太刀魚に振る異国の塩

「秋祭り」

川井素山

越後路やこのまま育て青田波
喉黒や語り残して夏終る
手動ドア秋蝶入り来鄙の駅
秋祭りふんどし姿の小さき臀
釣人の眠る始発や秋涼し
ぶどう描く人それぞれの色となり

「年尾忌」

安藤虎酔

吠える犬なだめなだめの猫の恋
日本へ黄沙ミサイルのごと来る
一族を束ね君臨女王蜂
昨日とは打つて変つて月朧
秋刀魚焼く匂ひにくぐる赤暖簾
年尾忌や巡礼詠みし句に痺れ

「秋の空」

田島昭久

蝉の声小さくなりて秋の暮
窓よりの見做れた景色秋の嶺
花壇には隙間目立ちて暮の秋
朝顔の花色薄く秋深し
罌雲見上ぐる人も日射し避け
空高し言葉行きかふ市場かな



撫子集

主宰選



小池清司

秋鯖を一塩にする片擗

野仏に誰が手向けしか秋桜

草の実を土産に猫の朝帰り

踊る手の白きに惑ふ風の盆

姥捨てふ駅名のあり敬老日

蟋蟀やピアノ演奏盛り上げて

大吟醸香りに混ざる夜霧かな

藤袴生垣越しに手を振りて

沸き上る熊蟬時雨降り懸り

朝霧や犬の散歩がのつと出て

澄み渡り天地一体秋深し

秋の虫丑三つ時の宴かな

涼風や稲穂を撫でて色かへる

曇天に藍を失う秋の海

歳かさね三秋楽しむ酒さかな

長久保郁子

レモンテイ独りの時の香りたつ

蒸しあがり湯気立つ芋を仏前に

古雑誌にまぎれてをりし秋団扇

靴底に踏む城跡の木の实かな

半分に切られ貫はれゆく西瓜

岡野安雅

山本草風

指先に線香の匂ひ墓参り

青木 英林

葡萄棚続く街道甲斐の国

中天の満月目指しへリコプター

名月を家の兎と並び観る

秋高し飛行機雲は一直線



那須野集

主宰選



文字消えし仏足石に銀杏散る

田中清秀

ベランダに心もとなき青ふくべ

池内とほる

湧き水に苔洗はれて秋涼し

秋蝶のひらりと舞ひて花から花

秋空に皇帝ダリヤ丈高し

マンシヨンの谷間の葎虫の声

九品仏伽藍に響く法師蟬

蟻一匹虫の大羽を運びけり

甲斐駒を木曾へ乗り替へ伊那の月

井月や風にまかせて青ふくべ

秋祭り端榛担ぐ若旦那

森岡陽子

秋の暮風が運ぶか馬頭琴

丸山酔宵子

蜻蛉飛ぶ富士の裾野の湧水池

潮風の砲台跡に小萩咲き

七年後五輪歡喜の白露かな

こんがり焼けた秋刀魚に酢橘かな

軍艦と釣舟行き交ふ秋夕焼

生垣の葉先夕日に薄もみぢ

庭に咲く薔薇の葉濡るる秋の朝

友の死を告げて舞ふのか秋の蝶

トテ馬車の蹄の音も九月かな

小柳千美子

奥山や鳴き絶えてゐる秋の蟬

柳田皓一

星月夜途切れ途切れに牛の声

梅の枝ゆつくり動く秋の蟬

円覚の峰に灯りし紅葉かな

小雨さにはたと止みけり秋の蟬

遠き日の子らの声聞く芒原

銀ブラの思はぬときに秋の蟬

道普請踏みしだかれし葛の花

吹けば飛ぶ骸ありけり秋の蟬

分校のプール水抜く夏の果

和田勝信

不揃ひの房の残りし葡萄棚

後藤克彦

朝の月雨雲去りて秋高し

涼風や掛け声ひびく朝の市

秋出水青淵全て泡の白

大沼にはや秋風の立ちにけり

雲流れ刈田の煙流れ消ゆ

太き幹たて一列に蟬並ぶ

山里の芒の若穂揺れにけり

コスモスにほくろの如くとまる虫

綿菅の白玉そよぐ風に揺る

橋本修平

空気が変はり長月の始まりぬ

長島清山

綿菅や池塘餓鬼田といふとかや

駿河湾に渡り鳥行く姉の葬

チングルマ花枯れ落ちて稚児車

空の藍海紺碧の秋の宿

炎昼のたぎりて落つる黒部ダム

伊豆の宿百舌鳥を聞きゐる浜辺かな

炎昼や瀑布に勝る黒部ダム

なが月の酒くみ交はすクラス会

マッターホン突出る頂空高し

吉田博行

空高し朝日に燃ゆるマッターホン

秋空に映ゆる景色のループ橋

秋風にカウベル響くアルプスの谷

見渡せばぶどう畑の甲斐路かな



撫子集・那須野集鑑賞九月号より

客員 村上克哉

撫子集

庭下駄を仕舞ひ忘れて戻り梅雨 小池清司

うっとうしい梅雨が長く続いて、雷を伴って大雨が降り漸く終わったかと思えばまた梅雨が続くこともある。戻り梅雨である、近年は異常気象で局部的な大雨、ゲリラ豪雨の様相を呈し、今年は5月末に梅雨入り7月初め平年より15日も早く梅雨明けした。雨が止み庭木や草花の様子を見て回り庭下駄を沓脱ぎの踏み石の上に置き忘れて仕舞った、戻り梅雨の様を詩情深く詠んだ。

わが丈を越えて歩道の立葵 長久保郁子

葵と言えば立葵、立葵は小アジアまたは中国産で鑑賞用として盛んに栽培され、6〜7月頃紅、紫、

白など大型の5弁花が下から上へ咲き上がり、開き尽くした時梅雨の終わりととも言われる。庭先や畑の畦に良く植えられるが、街路の脇でも良く見かける。立葵は身長を越え高さ2、3メートルにもなり花色は美しい。

外野手がボール探すや草いきれ 岡野安雅

夏の日が照りつけて茂った草がしおれ、むんむんとした湿気とむせるような匂いを放つ草いきれ。河川敷のグラウンドか、空き地での草野球。外野への飛球は野手の頭を越え、ファールは大きくそれて叢へ消えた。夏草の激しい生命力に茂った草いきれの中ではなかなか見つからない。

駒草の優雅に揺れて山陰し 青木英林

ケシ科の多年草で高山植物の女王と呼ばれる。花は横から見ると馬の顔に見えるのでこの名が付いた、自生のものは他の植物と混生しない。本州の中部以北、北海道にわたって高山帯の砂礫地に7〜8月頃

人参のように細かく裂けた葉のあいだから茎を伸ばし10センチ程の高さの淡紅色の花を下向きに咲かせる。険しい岩間を走る風に揺れ優しく上品で、孤高の様は女王の名にふさわしい。

ひまわりが首を傾げる昼下がり 山本達人

夏の風物詩として良く知られるキク科の一年草。インカでは太陽神の化身とされ、ペルー国花ともなっている。夏から初秋に2〜4メートルの太い茎頂に10〜40センチの大輪の花が横向きに咲く夏を代表する花、茎と蕾の間は太陽を追うが花が咲くと追わず大輪になる。いかにも生命力旺盛で鮮やかな黄色の明るく希望に満ちた幸せな花だ。最も気温の高くなった頃の向日葵を首を傾げると捉え詩情豊かな表現。

「那須野集」

葉先から雨粒ぼとり夏の夕

森岡陽子

暮れなずむ長い夏の夕暮れどき、昼の暑さも漸く和らぎ、打ち水をして吹く風の涼しさや風鈴の音にほっとした一時を過ごす。夕立の上がった庭木の葉先の雨滴が夕日に映え、雫が次第に膨らみやがて落ちた。ぼとりと瞬間を捉えた表現がいい。夏の夕の解放感と安堵感と何処か物悲しい思いがある。

陽に透ける殻の薄さや蝸牛 池内とほる

童謡にも唄われ親しまれる陸生の巻貝、5〜6層の螺旋型の殻は右巻き。頭に2対の長短の触覚があつて伸縮する。木の葉や草その他庭先など至る所に現れるが晴天が続くと葉陰に潜んでいる、全国に700種程生息すると言う、5〜7月頃特に雨の中見掛けることが多い。抜け殻を拾ってみると薄く押しせば潰れそうだ「殻薄き蝸牛まばゆく掌に享くる」永井絹子の句もあり、陽に透けるの上五と「や」の詠嘆で親しみと愛しさが読まれた。以下略

伝言板

1 第二十三回本部句会(原則第二金曜日)

①日時 2013年11月8日(金)
14:00~17:00

②場所 目黒区「下目黒住区センター」
3階会議室

③投句 当季雑詠 5句

④会費 1000円

2 第二十四回本部句会

①日時 2013年12月13日(金)
14:00~17:00

その他事項は第二十三回と同じ

3 第二十三回吟行(原則第四火曜日)

日時 2013年11月26日(火)

場所 東大界隈

交通 都営地下鉄大江戸線
「本郷三丁目」下車徒歩5分

集合 都営「本郷三丁目」駅
改札出口 11時

句会場 「文京区立不忍通りふれあい館」

4 第二十四回吟行(注・第三火曜日)

日時 2013年12月17日(火)

注意 第三火曜日に変更
新宿御苑

場所 新宿御苑

交通 JR新宿駅より徒歩10分
新宿御苑インホームション
センター内 11時

集合

句会場 未定

昼食 未定

出句数 嘱目3句

費用 交通費・昼食代各自負担。
会場費均等割り

申込 11月20日まで喜仙に
(FAX又はTEL)

昼食 各自用意

出句数 嘱目3句

5 「かさね」友の会の皆さん

投句をされる時、裏面に「友の会の声」欄がございますので、句評、近況

報告、ご意見などご自由にお寄せください。
なお友の会の皆さんは特別作品(十句)、随筆、その他論文等をいつでも投稿することができます。お待ちいたしております。

会員募集

何時からでも「かさねの友」になれます。

年会費 12000円(前納)

ただし年次途中入会者は入会申し出の翌月より12月まで月割りで納付

見本誌 400円(切手可)

見本誌請求先
15210033
東京都目黒区大岡山2-7-5
かさね俳句会 佐藤喜仙

「かさね」俳句の基本

I 前提

- 一、俳句は世界最短の「詩」である。
- 二、有季・定型・文語体を旨とする。

① 「詩」とは

水原秋櫻子が俳誌「馬酔木」の昭和六年（一九三一年）十月号に載せた「自然の真と芸術上の真」より抜粋

「ただ自然の真だけを追求したところで詩人たる資格はない。心を養い、主観を通して見たものこそ文芸上の真で、これを尊ぶ人が詩人である」

② 有季の原則

原則①

「季語とは累々と先達が磨いてきた季節を表す言語群であり、歳時記により集大成されている」

原則②

「季語が一句の中で使われ、その句の季節を明確に表出する時、その季語を「表季語」と称する」

原則③

「一年を通して存在する現象、あるいは事物が季を定められている語彙の場合、その定められた以外の季節においてはその語彙は季語とは見做さない」

原則④

「季重なりとは同季に属する季語を一句の中で二語以上重ねて使用する場合をいう」

原則⑤

「例えば絵・版画・掛け軸・屏風・襖絵等に描かれた、通常季語と見做される花鳥等は、季感がないので季語とはみなさない。同様比喩に使われている通常は季語である語群もやはり季感が無きがゆえに、季語とはみなさない」

③

文語体について

俳句は韻文であることを守るため文語を使用し、用言においては歴史的仮名遣いを必ず使用することとする。

II

俳句の約束事

一、切れ字（十八字）を使い俳句にメリハリをつける。

現在切れ字とされている文字は、や、かな、けり、もがな、し、ぞ、か、よ、せ、れ、つ、ぬ、へ、す、いかに、じ、け、けん。

二、表現

主観を直接表現せず、具象表現を使うことにより、自分がその一句の中で言いたい主観を暗示の形で言い表す。

三、地名・固有名詞

地名・固有名詞は一句の中にあつて季語に次ぐ重要な働きをするが、一句の中で使用する時は少なくとも大方の俳人が知っているであろう地名・固有名詞にとどめる。

四、三段切

形は三段切でも言わんとする内容が繋がって居れば良しとする。

例 完全な三段切 奈良七重七堂伽藍八重桜 芭蕉

三段切でも可 初蝶来何色と問ふ黄と答ふ 虚子

五、前書・ルビ

前書は慶弔の句にのみゆるされる。

ルビは誌中では使用しない。

III

俳句の作り方……山口誓子

私の俳句の作り方を、図式で現せば、至極簡単である。感動が先立たねばならぬ。事物と出会って思わず「ああ」と叫ぶその叫びから、俳句は生まれるのである。